

マクセンティウスとコンスタンティヌス

弓削達

三〇六年十月二十八日より三二年同月同日までロマに於ける非合法皇帝であつたマクセンチウスについて、同時代の著作家カイサレアの司教エウセビオスは、その「教會史」と「コンスタンチヌス大王傳」に於て殆ど同文を以て、この皇帝が不徳漢であつてロマの上流婦人を屢々瀆した⁽¹⁾こと、ロマ民衆を理由なく殺戮したこと、財産没收を目的として罪なき元老院階級の人々を殺害したこと、勝利をえんために狂氣に類する魔術を行つたこと、その結果としてロマは前代未聞の食糧不足に悩まされたこと、等を傳えている。⁽¹⁾かくの如きマクセンチウスの暴君像と正に對照的にエウセビオスはコンスタンチヌス帝について、同帝がロマを暴君マクセンチウスより解放するために着々戦備を整えたこと、⁽²⁾戦備の最中帝と全軍は或日の夕刻頃天空に光輝に包まれた十字架とその傍らに「之にて勝て」と記された文字を見たこと、それに續く或る夜夢にキリストが現われかの天空の徴を軍旗とすべきことを帝に奨めたこと、それに從つて帝は輝かしい軍旗を作りそれにキリストの頭文字の組合せ(✠)を附したこと、續いて帝は司教を招き聖書講筵に列した⁽³⁾こと、等を語つている。エウセビオスは更に暴君マクセンチウスに對する神に愛せられた帝コンスタンチ

ヌスの討伐戦の大詰へと一氣呵成に筆を進め、その昔エホバがモーセの導く神の民を助けてファラオの追手を紅海に沈めた如くにマクセンチウスはミルヴィウス船橋の損壊のために石の如くにチベルに落ちて水死したこと、コンスタンチヌスがロマの上下貴賤を問わず全民衆に歡呼せられてロマに入城したこと、併し帝は勝利の源なる神に榮譽を歸し戦勝記念像によつて救いの徴を天下に公示したことを述べている。⁽⁴⁾

エウセビオスと同時代の同じくキリスト教著作家ラクタンチウスに歸せられている「迫害皇帝の末期」⁽⁵⁾は、諸帝間の政治史的展開には特別の注意を拂つてゐるが、マクセンチウスに對してはエウセビオス程には興味をもつていない。けれども、同帝が悪意に満ちた有害極まる人物であり、實父（マクシミアヌス）に對しても舅（ガレリウス）に對しても當然の敬意を拂わなかつた程傲慢かつ反抗的であつたことを語ると共に、⁽⁶⁾ロマ民衆と親衛隊の推舉によるマクセンチウス登極の事情については詳細に記し、⁽⁷⁾同帝が父の死の復讐戦をコンスタンチヌスに宣し非常な惡徳漢マクシミアヌスと同盟を結んだこと、⁽⁸⁾優勢のマクセンチウス軍は次第に後退したこと、コンスタンチヌス帝は夢に従つて神の徴（P）を軍旗に採用したがマクセンチウスはロマ民衆の暴動に脅えシビルライの書に聞きそれに従つて出撃して終に敗退しチベルに溺死したこと、コンスタンチヌスは元老院と民衆の歡呼の中をロマに入城したこと、⁽⁹⁾等を語つてゐる。

かくの如く最も事件に近い同時代人なるエウセビオス及びラクタンチウスに於てはマクセンチウスに對する敵對的否定的な彈劾が現れているが、かかる暴君像はそのまゝ兩者以後の著作家たちにも見出だされる。アウレリウス・ヴィクトル、エウトロピウス、エピトメに於ては一致してむしろ熱情的な敵意が表明せられてゐるのであり、更に背

教者ユリアヌス、リバナオス、アノニムス・ヴァレシアヌス、ゾナラスを初めとしてコンスタンチヌスに對して好意的でないゾシモスに於てすら同じ型のマクセンチウス像が受容られているのである。⁽¹⁰⁾そしてこのような否定的判断は獨り古代の著作家に見出だされるのみではなく、近々二、三十年前迄は類似の暴君像が一般的であつたことを知るのである。今、二、三の代表的研究者についてのみ例示してみると、先ずオットー・ゼークは⁽¹¹⁾同帝について「その姿は醜く見榮えせず、高慢と同時に無能力であり、殘酷、淫蕩、迷信的であつて、その高貴の生れを除いては臣下の氣持を惹きつける如何なる特性をも持たなかつた。彼は、自らは軍事的に全く無能力であり軍隊は他の將軍に指揮させたのに、兵士の忠誠と歸服を確保するために兵士に次々に金をやつて馬鹿げた浪費をした。」と記し、エルンスト・シュタインは⁽¹²⁾同帝を「横柄かつ畸型的であり、戰士的に非ずして怠慢である」となし、その政治を特徴づけて「元老院階級に最も重く他の民衆にも非常な重壓を與えたところの殘酷かつ放恣なる武斷政治」であつたとなしている。又少し溯ると、エウセビオスやラクタンチウス等同時代のキリスト教著作家により榮化せられたコンスタンチヌス像を打破しエウセビオスを「忌むべき頌詩作家」ときめつけコンスタンチヌスを類い稀なる現實政治家として示さんとしたヤーコブ・ブルックハルトは、⁽¹³⁾マクセンチウスのことゝなると不思議にもエウセビオス記事をそのまま用い、同帝が「内臓占いのために妊娠せる婦人や子供の腹を切開し、祕密の行爲により惡靈を呼び寄せた」となし、「この事は、異教については殆ど正しい觀念を持たず又必ずしも眞理を言わんとしてはいないエウセビオスが敍べたところではあるけれども、マクセンチウスの惡質な粗野については、この所言に對して何ら根據のある疑いを挿みえない。」と⁽¹⁴⁾斷じ、又同帝の反道德的行爲については「マクセンチウスの如き所謂怪物にあつてはその放蕩と非行は、前代のもの

と比較してある小市民的なるものをもつていた。」と評するのであり、又、その著「コンスタンチヌス帝とキリスト教會」⁽¹⁶⁾に於てブルックハルト流のコンスタンチヌス像に根本的な修正を加えたエドゥアルト・シュヴルツも、マクセンチウスについては「彼は父から残酷な粗野と政治家的素質の缺如をのみ受継いだが、戦士の勇氣は之を受けなかつた」⁽¹⁷⁾と評している。マクセンチウスに對する同様の否定的評價の例は尙任意に増加せられうるであらう。併し乍らかかる暴君像がそのままでは受容られ難いことは、エウセビオスらの記事そのものが巧みにコンスタンチヌスとマクセンチウスの對置を行つてゐる或る不自然さの中に既に讀み取りうるのである。⁽¹⁸⁾そしてこの問題に注目して正しいマクセンチウス像の再發見に成功したものは、パウリ・ヴィッソフ古典古代學辭典中にグロアクによつて執筆せられた「マクセンチウス」なる長大なる項目であり、この項目は右古代學辭典が單なる辭典に非ずして實は優れたモノグラフィの集積であることを實證する數ある例のうちの一つであると考えられる。即ちグロアクはここで單に文獻的史料を縱横に驅使するに止まらず、里程碑その他の碑文及び就中貨幣を用いて、多くの點で舊説を覆しつゝマクセンチウスを繞るロマ帝國の政情を分析すると共に、同帝の人物・性格・その政治について興味ある考察を加えている。そこで先ずグロアクに從つてマクセンチウス像を再検討し、本稿の企圖する問題に近ずき度い。

註(1) エウセビオスの章句は重要であるのでギリシヤ語原文を掲げ度い所だが、便宜上左に拙い乍ら邦語に移しておく。その際「教會史」と「ウイタ」の同一文は斷りなしに書き下し、「教會史」にのみ存する語句は()を以て圍み「ウイタ」にのみ現れる語句は〔 〕に入れ、更に殆ど同義ではあるが原文に於ける表現のやゝ異なるもの或は語の配列の異なるものについては傍點を以て之を表すこととする。又行間にある數字は「教會史」の章節である。尙、使用テキストは「教會史」はシュヴルツ校

定本を用い (Eusebius Kirchengeschichte, Herausgegeben von Eduard Schwartz. 3. Aufl. 1922.) が「ウィタ」はその最良校定本なるハイケル本が手許にないの p. Migne, Patrologia Graeca XX 所収のものを用いた。……(彼の息) マクセンチウスはロマに於て暴政を打建てていたが、彼は初めの程は、ロマの民衆の人氣を取りそれに阿らんと我らの信仰を装うと共に、その意味で臣下達に命じてキリスト教徒に對する迫害を中止せしめた。即ち彼は敬虔を装い先行の諸帝に比して遙かに慈悲深く穩健であると思われたかつたのである。ところが彼が期待されていたような人物ではないことが行爲によつて示された。即ち凡ゆる不虔な行爲に陥つたのであつて、亂行と放蕩との業でその爲さざるものはなく、幾多の姦通、凡ゆる種類の墮落事を行つたのである。」「ウィタ」一ノ三三——ロマに於けるマクセンチウスの姦通について。即ち、既に當時帝都を奪取していた彼は、不敬神と不虔なる行爲に没頭するに熱心であり、狂亂と惡徳の大膽な行爲で彼の爲さざるものとなつて程であつた。』夫達からは合法的な妻達を引離し彼女らに最も恥すべきことを行い、そして(再び)彼女らを夫達に送り返したりした。而も之は名も知れぬ未知の者たちに對して(手出しをしようにとした)ばかりではなく、(實に誰よりも先ず)ロマ元老院の(最も名ある人々のうちの最も顯出した人々)「最高位を持てる人々」を瀆したのである。「彼は實に多くの高貴の婦人に最も恥すべきことを行い、如何にして自らの止どめない放蕩の心を満足せしむべきかを知らなかつた。又彼は基督教徒の婦人達にも手出しをしたが、その時は彼自らの慾望のための手段を考え出すことは出来なかつた。というのは彼女らは彼に肉體を許すよりはむしろ生命を斷つことを願つたからである。』——續く「ウィタ」一ノ三四は「教會史」八・一四・一六以下を繰上げたものである——「ウィタ」一ノ三五——マクセンチウスによるロマ民衆の殺戮。かかる事を敢てせる」彼を、民衆も役人も高きも低きも凡ての人が恐れ、恐ろしい暴政に困憊していた。靜かに生活しひどい奴隸狀態を耐えていた人々にとつても矢張り粗野極まる殺害慾にもえた暴君からの解放といふことはなかつた。というのは、かつて或る時、つまらない口實の下に彼は民衆をば彼を守る親衛兵の手に殺戮のために委ね、實に多數のロマ民衆の一群を首都の眞只中で、スキュタイ人や蕃人によつてではなく彼らと同國人の槍と武器によつて殺戮したのである。又、元老院階級の人々についても、「その各々の」財産が狙

われて如何に多くの殺害が行われたか、それを数え上げることが出来ない。他の場合には別のきつかけが作られて多くの人々が殺された。「——「ウィタ」一ノ三六——コンスタンチヌスに對するマクセンチウスの魔術とロマに於ける食糧不足。」^{一四・五}之らの悪事の末にはこの暴君は魔術に走つたのであつて、彼は魔術的な考えの下に或る妊娠せる婦人を断ち割り或は生れたての赤子の内臓を探究し、獅子を殺し更には悪魔を呼び出だし、惹起せる戦争をさけるために之以外の言えないようなことをしたのである。というのは彼にあつては之らの事を爲すことにより（勝利をかち得ることに凡ての望みが向けられていたのである。）「勝利を制せんと望んだのである。」^{一四・六}實に彼は、ロマに於て、暴政を布いたが、彼が如何なることをなして臣下を抑壓したかは言えない程である。そのため今や必需食糧についても極度の缺乏と困窮に陥つた。この缺乏は我らと同時代人の記憶するところによれば、之以外の時に「かつて」ロマに於て起つたことのない程のものであつた。——續いて「教會史」は一時話題をマクシミヌスの悪行に移し再びマクセンチウスに立戻るがその併行記事を「ウィタ」は一ノ三四に繰上げてゐる——「——「ウィタ」一ノ三四——總督の妻が貞淑の故に如何にして自殺したか。」^{一四・一六}（以上の婦人達も驚嘆に値するが併しそれら以上に極度に驚嘆すべきものはロマに居た一婦人で、彼女はその地の暴君マクセンチウスがマクシミヌスと同じようなことを行つて潰そうとした凡ての婦人の中で實に最も高貴な婦人であり最も貞淑な婦人であつた。^{一四・一七}）というのは（總督の職を持つる其地の元老院階級の人々のうちの或人の妻は）暴君に斯様なことの手助けをする者共がその家の前に立つことを知り——彼女（も）基督教徒であつた——、又その夫が（而もロマの總督であつた夫が）彼女を捕えに來た者共に、恐怖のために彼女を連れ「去」ることを（許した）「命じた」ことを識るや、（直ぐに身纏ひをするために）（普通の身装を直す爲に）暫く「の時」を乞ひ、その部屋に赴き、彼女獨りになるや劍を（自らに）胸に）突き刺した。直ちに彼女は死し色事取持男共に屍を残すことになつたと共に、他方は之らの行爲によつて凡ての言葉に優つて聲高らかに、敗れることなく破壊されることなき唯一のものこそ基督教徒における（徳）^{一四・一八}「貞淑」であることを、現在生を享け又之以後生れて來るであろう凡ての人々に示したのである。「斯くしてか程の貞淑が示されたのであつた。」

一橋論叢 第二十八卷 第四號

註(2) 「ウィタ」一ノ二六。「彼は如何にしてロマをマクセンチウスより解放せんとしたか。彼(コンスタンチヌス)は又世界の凡ての構成部分の一つの大きな身體の如くに考へていたのであるが、萬國の頭即ちロマ人の領土の首都が暴君的隸從に服しているのを見つゝ、初めの程はそれに對する復讐を他の殘餘の諸部分領域の支配者達に委ねていた。というのは彼らの方が年長者であつたからである。併し纏てそれらの何人も救助をなしえず、救助せんと試みた者達も恥ずべき末期をとげた。そこで彼は、首都がか程に苦しんでいるのを見ねばならぬとするならば彼にとつて生は不快であると語り、暴政の破壊の爲に準備をしていたのである。」

註(3) 「ウィタ」一ノ二八—三二。

註(4) その記事を註(1)と同じ要領で譯出してみる。……(名譽に於ても地位に於ても帝國の筆頭に位するコンスタンチヌスが、初めて、暴君によつて抑壓せられたロマの人々に憐みを持ち、天に在す神・彼の言・萬人の救い主なるイエス・キリストを祈り乞うて保護者として傍らに呼び)「——」ウィタ」一ノ三七——イタリアに於けるマクセンチウス軍の敗北。が併し、以上凡てのことに對してコンスタンチヌスは同情を持ち、暴政に對抗して完全武装によつて準備した。そこで先ず凡てのものの上なる神を自らの保護者となし、彼のキリストを救主及び援助者として呼び招き、更に勝利に導く徴・救いの徴を、彼を守る重裝歩兵及び親衛槍兵の頭上に附した。」かくして彼はロマ人にその祖先より傳來せる自由を返し與えるために全軍を以て進軍した。さてマクセンチウスは臣下の忠誠よりも魔術の技に信頼を寄せ、(併し)首都の諸門外に出ることを敢てせず、重裝歩兵の(無數の)大軍と、軍隊の多數の軍團とを以て、(ロマの周圍並びに全イタリアの)彼によつて抑壓せられた限りの凡ての地方と地點並びに町を防衛した。神よりの保護に結ばれた帝は、暴君の第一、第二、第三線を攻撃し、實に巧みにその凡てを(打倒し)「その最初の攻撃以來壓倒し」イタリアの(諸地點の)殆ど可能な限り奥深く迄進軍した。「——」ウィタ」一ノ三八——「チメル河の橋に於けるマクセンチウスの死。」そして彼は既にロマそのものの近傍にあつた。その時、恰も暴君の爲に彼がロマ人たちと戦わねばならなくなるといふことのないための如くに、神はこの暴君を何か鎖を以てするよ、門よ

り遠くに導き出した。かくして、作り話にあるかの如くに大抵の人々によつては信じられてはいないが信仰を持てる者達にとつては聖書(の中)に記されたこととして信じられるところの、不信仰な者に對する昔からの言い傳えが、之らの行動凡てを通して、要するに信ずる者にも「又同じく」不信仰者にも奇蹟を眼の當り見ることによつて認識せられたのであつた。即ち「かつて」モーセ及び神を恐れる(昔の)ヘブライ民族の時代に神「パロの戦車とその軍勢を海に投げすて給」い「パロの勝れたる軍長等は紅海に沈み(大水かれらを淹)う」た丁度そのように、マクセンチウスと彼の周囲の重装歩兵並びに親衛槍兵は「石の如くに」深處に沈んだのである。マクセンチウスはコンスタンチヌスと共にあつた神よりの力の前に退却し、退路の前にあつたところの、彼が船を以て橋となし巧みに架橋してあつた河を渡つたのであるが、その仕掛は彼自身の滅亡のために作つたものようであつた。「マクセンチウスはその仕掛によつて神に愛せられた者を覆滅しようと望んでいたのであつたが、併しコンスタンチヌスの右には彼の神が共に居り、マクセンチウスは神より見離され秘密の不幸な仕掛を己れ自らに向つて作つたことになつたのである。」^{九・六}マクセンチウスについて(恐らく)「又」言われうるであらう。「即ち曰く」「又坑をほりて深くし己がつくれるその溝におちいれり、その残害はおのが首にかへり、その強暴はおのが頭上にくだらん」^{九・七}その如くに實に(河の船橋は解體し)「神意により船橋の仕掛はかくされたる所が望みもしなかつた時に解體し、」橋が沈むと共に兵員諸共船は深みへと沈み行き、最も神なき者が真先に、次いで彼を守る親衛盾兵「及び親衛槍兵」が沈んだのである。何故なら神の言は豫言して曰く「彼等は猛烈き水に鉛の如く沈めり」と。^{九・八}それ故、神に祈つて勝利を與えられた彼らは偉大なる僕モーセの周圍にありし人々と丁度同じく、恐らく言葉によつてではないにしても、業によつて、古えの神なき暴君に對して歌つた次の如き歌を唱いかつ語つたのである。「我エホバを歌ひ頌めん、彼は高らかに高くいますなり、彼は馬とその乗者を海に投げうちたまへり、我が力わが歌はエホバなり、彼は我が救拯となりたまへり」又曰く「エホバよ神の中に誰か汝に如くものあらん、誰か汝の如く聖くして榮あり讃ふべくして威あり奇事を行ふ者あらんや」^{九・九}「ウイタ」一ノ三九——コンスタンチヌスのロ「入城」以上の如くしてコンスタンチヌスは偉大な僕と同じように、彼の時代に之らの業によつて以上の歌に似た類似の歌を

マクセンチウスとコンスタンチヌス

最高の支配者、勝利の源(なる神)に對して歌い、勝利の歌聲の只中を「帝都(ローマ)へと入城した。凡ての人々は(凡て女も子供も一緒に)元老院階級の人々も「その土地」その他、「貴顯の人々(最も)有力な人々も、(恰も牢獄から解放された人々の如くに)ローマの凡ての民衆と共に、喜びの眼差を持ちその心を昂めて、歡呼と洩り難き喜びを以て(恰も救助者・救い主・善行者を迎えるかの如くに)一齊に彼を迎えた。「男も女も、子供も多數の奴隸も一齊に抑え難き叫びで彼を救助者・救い主・善行者と呼びかけた。」併し彼は(殆ど)生れつき神に對する敬虔を持つており、之らの歡呼に誇ることは(全く)なく、稱讃によつて高慢になることもなく神より助けの來つたことを(よく)知り直ちに「勝利の源にて在す者に感謝の祈りを捧げたのである。——「ウィタ」一ノ四〇——十字架をもてる彼の立像とその碑銘について。彼は大文字と記念像とを以て全人類に救いの徴を公告した。即ち帝都の眞只中に敵に對する大戦勝記念碑を打ち建て、消えることのない文字を以てこの救いの徴がローマ人の國と全帝國の守護符であることを刻んだのである。」(救いの苦難の徴を)「十字架の形をせる長槍を記念像の中の」(彼自身の像の手に(附けるように命じた。))「附與し」(かくして人々は十字架の救いの徴を右手に持つ像を)ローマに於ける最も繁華な場處に立てた。そして彼は言葉通りの次の如き碑銘をローマ人の言語で刻んだのである。曰く。この救いの徴・勇氣の眞の證により、余は汝らの町を暴君の束縛より救ひ(解放し、更に元老院及び)ローマの民衆(を解放してそれ)に古えの光榮と名譽とを返し與えたり」と。

註(○) de mortibus persecutorum がラクタンチウスに歸しうるや否やは問題のあるところだが(後述)こころは一應ラクタンチウス作とする。

註(○) de mort. pers., 18, 9. 註(○) ibid., 26, 1—3. 註(○) ibid., 43, 3—4. 註(○) ibid., 44, 1—10.

註(○) 之に就つて Groag, Maxentius (PW XIV 2, 1930) S. 2417—8. 註(○) O. Seeck, Geschichte des Untergangs der antiken Welt. I. 4. Aufl. (1921) S. 80—81 (註) 2. Aufl. S. 76. 註(○) E. Stein, Geschichte des spätromischen Reiches. I (1928), S. 126 ff. 註(○) J. Burchhardt, Die Zeit Constantins des Grossen. 3. Aufl. (1898). S.

326—7. 註(14) *Ibid.*, S. 258. 註(2) *ibid.*, S. 273. 註(9) E. Schwartz, *Kaiser Constantin und die christliche Kirche*, Berlin, 1913. 註(17) ders., *Constantin (Meist. d. Politik I^o)*, S. 287. 何Nは Groag, *Maxentius*, S. 2482. 何Nは 註(21) 註(1) 何N(4) 添々見4. 註(2) Groag, *Maxentius*, (PW XIV 2, 19^o), S. 2417—2484.

二

先ず、エウセビオスのマクセンチウス記事に於てその暴君像の謂わば封印をなしている婦女子に對する亂行と東洋的魔術の點については、グロアクは、その何れもが典型的な暴君像に屬することを指摘しつゝ、次の諸事實を確立する。即ち、第一に前者については、三〇六年五月一日と三〇六年十月十二日との間に建立せられたと考えられるマクセンチウスの長子ロムルスよりその兩親に獻ぜられた記念碑の文面より推して同帝の家庭生活に頗る親密なるものがあつたと考えられること、又、夭折せるロムルスのために父帝が破格の英雄神殿を獻ぜしめてゐることからしてロムルスの死に對するマクセンチウスの悲歎の並々ならぬものであつたことが知られ、之も亦親密なる家庭生活を前提すること、第二に後者については、全體としては古羅馬傳來の宗教に従い傳統的慣習に従つてアウスピキウム、ハルスピキウムを⁽⁵⁾行い國事にはシビルライに問うたマクセンチウスにあつては、東洋的な魔術は殆ど考えられないことであつて、之は對コンスタンチヌス戦直前にシビルライに問うた一事が次第に誇張擴大せられたものであろうこと、従つて之らの諸事實より推して婦女子暴瀆と魔術は根據のない作爲であることが推定せられるのである。かくの如く傳

説的な悪徳暴君像を正に傳説として拒けると共に、グロアクは、マクセンチウスの性格一般についても、エウセビオス等から想像せられ従来も一般に受容れ來つた如き大軍を以てして尙コンスタンチヌスの劣勢な軍に脆くも敗れた軍事的無能力者・無氣力者とは凡そ異なる次の如き人間像を示すのである。

即ち、曰く。「曇らされ歪曲せられた傳承さえも同帝が輕蔑すべく下らない暴君ではなかつたことを示す」のである。成程彼には「熱火の如き感激、素早い決斷、賢明な計算と結合せる攻撃及び企畫精神」等總じて彼の征服者に豊かに與えられていた特性に缺けており、内氣で受働的であつて軍事的素質を缺き宮廷を空けたことも稀であつた。⁽⁸⁾ かかる性格形成に與つて力あつたものは、若くより帝位推定相續人として育てられたことに由來する過度の自己意識であり、既に若くして示されたこの自己意識は貨幣面に表れた彼の像にも示されている。併し乍ら、古典古代最大の有蓋建築物なるサクラ・ウィア沿道の巨大なバンリカ⁽¹¹⁾の築造（後にコンスタンチヌスが完成）に代表せられる大建築事業⁽¹²⁾、多數の里程標によつて證示せられるロマ附近を初め北伊、サルヂニア、アフリカ等に大規模に展開せられた首尾一貫せる大道路修築事業⁽¹³⁾は、單に古ロマ的傳統の保持や軍事的な意味を持つものではなく、運命によつて彼に許された唯一可能な光輝ある永續的事業であつて、彼が決して非精力的な無氣力な弱者ではなかつたことを證示して餘りある。のみならず比較的よく知られている對教會政策は彼が又善意、寛容、不拔等の性格を兼ね備えていたことを示すのである。⁽¹⁴⁾ 即ちエウセビオスでさえも「教會史」に於ては認めざるをえなかつたように、マクセンチウスは登極と共に基督教徒迫害を中止しロマ教會の司教選任を許したばかりか、マルケルルス、エウセビオスと相つゞ司教の嚴格主義によつて起つた流血の教會騷擾⁽¹⁶⁾をさえも忍耐して司教追放によつて改善を求め、次のミルティアードス（三一・七・二）――

三二四・一・一一)の下に至つて初めて平穩を取り戻したロマ教會に對しては公式書簡を以て教會財産の返還を行っている。⁽¹⁷⁾又、アフリカ叛亂軍アレクサンドロスに對する鎮壓戰に際して暴行を働いたマクセンチウス軍に關連して皇帝を非難する文書を公表せるカルタゴ教會執事フェリクス⁽¹⁸⁾の引渡しを拒絶せる同教會司教メンスリウスを一度はロマに招喚し乍ら歸還を許している。このロマ及びカルタゴ兩教會に對する注目すべき措置は上述の如くマクセンチウスの善意・寛容・不拔の精神を開示すると言わねばならない。基督教徒が軍隊にも居たことを證する碑文もある。⁽²⁰⁾マクセンチウスの殘酷についても具體的なことは何一つ提示されない。ロマ的傳統の更新に示される浪漫的理想主義は寧ろ彼の精神的高貴の徴であり、アフリカ遠征に際してはルフィウス・ヴォルシアヌスとルリキウス・ボンベイアヌスを、對コンスタンチヌス戰に際しては後者をと、夫、優れた勇將を選任派遣したことは軍事的組織力の存在を示している。⁽²¹⁾コンスタンチヌスの架した黄金の橋を渡らず死に至る迄戰つた戰士達の忠誠は、決してマクセンチウスの金離れのよさによつては説明されない。結局マクセンチウスの不幸は、三〇七年初頭にはセヴェルス⁽²²⁾の、同年後半にはガレリウスの相次ぐ攻撃に備えねばならず、三〇八年後半にはアフリカの叛亂に遭遇せねばならぬという非常態勢を餘儀なくせられ、最後には、所詮は及びもつかぬコンスタンチヌスを敵に持たねばならなかつたことであり、⁽²³⁾人たらんことを欲した最後の皇帝であるマクセンチウスを輕々に彈劾してはならぬ。⁽²⁶⁾

然らば殆ど凡ての傳承に於けるマクセンチウスの彈劾は何に由來するのであるか。この點の究明には同帝治下のロマ政情に關するグロアクの細かい分析全體が顧みられねばならない。それによれば、一つの鍵はロマ民衆及び元老院の間に於ける同帝の人氣の消長を探ることである。同帝の登極に際するロマ民衆の積極的關與⁽²⁷⁾に示されるように當

初民衆の間に好評であつた同帝の人氣は、當分は豊富な給養・輝かしい大建築事業・就中長期の皇帝滞在による首都ロマの重視などによつて維持されたが、上掲のユウセピオス記事にも反映している食糧不足がアフリカ、スペインの失陥によつて拍車をかけられて急速に悪化し、同時に優先的給與を受けたであろう兵士と民衆との不和が醸成せられた。この不和感は何れも或る時起つたフォルトゥナ神殿の火事を消火中の兵士の一モエシア人が神を瀆す言を發しそれに激昂せる「神を懼れる」民衆によつて殺害せられたことを誘因として大暴動に變じ、民衆六千人が倒れ遂に親衛隊の出動を見て鎮壓せられるという一大不祥事を招いた。皇帝には何の罪もないこの事件は皇帝に對する反感を決定的ならしめ、之がユウセピオス記事に現れる皇帝による大虐殺事件として傳承せられた。愈すべからざるこの反感はティベル河畔の戦いの直前に爆發し「コンスタンチヌス不敗」の叫びがあげられ、劣勢のマクセンチウスは明かに籠城を得策としたにも拘らず、城外に出撃し民衆暴動に備えてティベルを背にして戦うことを餘儀なくせられた。戦い敗れたマクセンチウスが陸續きで撤退せず敢て自ら破壊した船橋を渡つたのは自殺によつて民衆の手を逃れたに他ならない。次に、マクセンチウスの登極に對して少くとも中立的立場をとつた元老院と同帝との關係は、前者が同時代の貨幣に一度もその名を留めずコンスル職をも與えられていないことから推察されるように出發點から悪く、それは元老院階級に對する財政的負擔の加重と共に深刻化した。即ちマクセンチウスが初めて課したという大土地所有者に對する自由據出制 *institutum numerum species* は、偶々現存する碑文から明かな如く想像以上に多額である。政治的反對者に對しては追放、財産沒收を行つたであろうが、財産收奪のために殺害をも辭さなかつたというのは誇張である。けれども元老院階級の財産收奪はアウレリアヌスにのみやゝ類似の事が傳えられる前代未聞のことであつ

た。⁽⁴⁵⁾更に常時非常態勢にあつた軍事的情勢、老大な建設事業、民衆への給養等の莫大な出費のために、農民にきつい過度な課税は、一般の空気を一層重苦しくしていたであろう。

マクセンチウスを悪んでいたロマ民衆及び元老院の人々にとつてはコンスタンチヌスの入城は正に解放者のそれであつた。コンスタンチヌスの政治は、例えば自由據出制の元老院金庫 *foliis senatorius* としての永續化と固定化とに見られるように決して實質的負擔の軽減をもたらしはしなかつたけれども、⁽⁴⁶⁾民衆と元老院とはコンスタンチヌス入城を熱狂的に歓迎した。⁽⁴⁶⁾この氣持は先ず凱旋門刻文に於て表現せられ、その他の各種記念碑に於てマクセンチウスは彈劾され⁽⁴⁸⁾コンスタンチヌスは解放者として讃えられた。ところで、上掲のエウセビオス記事に見られる極端な惡徳暴君像及びそれとコンスタンチヌス像との巧みな對照は、單にロマ民衆と元老院側に於ける心理的契機を以てしては十分に説明し盡されたとは言えないであろう。グロアクはこの點に注意を向け、マクセンチウスに對する謂われなき宣戰を合法化し勝利を榮化せねばならなかつたコンスタンチヌスの側に於ける意識的な歴史の歪曲を想定し、「戦いの直後元老院身分の人々によりコンスタンチヌス親らの影響下にマクセンチウスの人格と治政の像が文獻的な形で *literarischer Form* 確定せられ」それが教會に受容れられて基督教的動機づけを與えられたものであると、と推定する。⁽⁵⁰⁾グロアクが明かにしなかつた文獻的な形とは具體的には何であろうか。この問題はグロアクとは獨立に後段に於て考察するであろう。差し當り、グロアクの線を押し進めたシェーネベックの研究を、それが行過ぎを含んでいると私考せられる故に、簡單にふれておき度い。

註(1) *Graaf, a. a. O. S. 2467.* 註(2) *CIL XIV 2825, 2826.* 建立年代は *Seeck, I^a S. 462.* 決定した。

マクセンチウスとコンスタンチヌス

- 註(㉞) *domino patri*……*pro amore caritatis eius patri benignissimo, dominae matri*……*pro amore adfectionis eius matri carissimae.* 註(+) Groag, S. 2443. 註(㉟) Zosim, II 16, 2, 16, 1. 註(㊱) Lactant, 44, 8.
- 註(㊲) Groag, S. 2462, 2467. 註(㊳) *ibid.*, S. 2483. 註(㊴) Lactant, 18, 9. 註(㊵) Groag, S. 2481 f.
- 註(㊶) *ibid.*, S. 2459—60. 註(㊷) 文藝叢書 P 14 Aurel. Victor, 40, 26, chronograph a. 354, p. 148 (Mommien) の *ἡ ἀρετὴ*。 註(㊸) Groag, S. 2461—62. 註(㊹) *ibid.*, S. 2483. 註(㊺) Euseb, h. e. VIII 14, 1.
- 註(㊻) Ihn, *Dannasi epigrammata*, 1895 Nr. 48. 註(㊼) Augustin, *brevic. coll. c. Donat.* 34. 註(㊽) Groag, S. 2448. 註(㊾) *ibid.*, S. 2462—4. 註(㊿) *ibid.*, S. 2447, 2475. 註(㋀) *ibid.*, S. 2474—5. 註(㋁) *ibid.*, S. 2426—8. 註(㋂) *ibid.*, S. 2430—2433. 註(㋃) *ibid.*, S. 2440—2. 註(㋄) *ibid.*, S. 2484. 註(㋅) Lactant, 26, 1—3, Zosim, II 9, Aur. Victor, 40, Anonym. Vales, 4, 6, Zonaras, XII 32, Eutrop, X 2, 3, epit. 40, 2. 註(㋆) Euseb, h. e. VIII 14, 1. *ἡ ἀρετὴ* *ἡ ἀρετὴ*。 註(㋇) Euseb, h. e. VIII 14, 6 = vit. Const. I 36.
- 註(㋈) Zosim, II 13, Chronogr. a. 354, p. 148. 註(㋉) Euseb, h. e. VIII 14, 3 = v. C. I 35. *ἡ ἀρετὴ* *ἡ ἀρετὴ* Vict, 40, 24, „*Prætorianis caedem vulgi quondam annuerit.*“ *ἡ ἀρετὴ*。 註(㋊) Groag, S. 2464—6. 註(㋋) Lactant, 44, 7.
- 註(㋌) 傳承は一致してロムスタンチヌス軍側が優勢だったと傳えているが (Zosim, II 15, 2, Lact, 44, 2) 又は用いながら (Groag, 2472—3)°。タロプクによつては注意せられなかつたが、マクセンチウスがアフリカ軍を呼び寄せたというところも亦 (Lact, 44, 2) 同帝が如何に劣勢の補充に腐心したかを示すと言えよう。
- 註(㋍) Euseb, h. e. IX 9, 4 = v. C. I 38 *ἡ ἀρετὴ* *ἡ ἀρετὴ* 帝出陣を神の奇蹟となつてゐるのは、出陣が明かに非常識であつたからである。その意味でこの章句はタロプク説の補強となる。
- 註(㋎) 背水の布陣と共に傳承 (Lact, 44, 9, Zosim, II 16) が混亂して傳えている船橋の切斷も、タロプクの考える如く (S.

2478) 彼の道義と徳とにほかなく、尊厳と徳とをたのびはざるをよ。彼らの臣服は彼等のシロキンを誰とせしむる。

註(5) Groag, S. 2480. 註(8) *ibid.*, S. 2423. 註(9) *ibid.*, S. 2454. 註(10) Aur. Victor, 40, 24, primus……
instituto pessimo numerum specie patres aratoresque pecuniam conferre prodigenti sibi cogeret. Zonar., XII 33.

註(11) CIL VI 37118. 註(12) Euseb., h. e. VIII 14, 4=v. C. I 35. Paneg. XII 3, 6. 註(13) Groag, S. 2455
—6, 註(14) *ibid.*, S. 2453—4. 註(15) *ibid.*, S. 2454, 2455. 註(16) Euseb., h. e. IX 9, 9=v. C. I 39. Lactant.,
44, 10.

註(17) CIL VI 1139, „quod instinctu divinitatis, mentis magnitudine, cum exercitu suo tam de tyranno quam de
omni eius factione uno tempore iustis rempublicam ultus est armis.“

註(18) CIL X 5061, Atina „sevissimam tyrannidem.“ CIL VIII 18261 Lambaesis „cruces et proelia saeva tyranni.“ 等。

註(19) CIL XIV 131 Ostia „restitutori publicae libertatis, defensori urbis Romae, communis omnium salutis au-
ctori.“ CIL VIII 2721 Lambaesis „reddita libertate.“ CIL VIII 7006 Cirta, „donitori universaru [in factionum],
q[ui] libertatem tenebris servitutis oppressam sua felici v[ictoria] nova] luce illuminavit. 註(20) Groag, S.
2417.

三

主たる力點は貨幣面を主要史料とするコンスタンチヌス帝の宗教政策の發展を究明することに向けられているハン
ス・フォン・シエーネベックの「マクセンチウスとコンスタンチヌスの宗教政策」⁽¹⁾と題する研究書は、マクセンチウ
ス暴君傳説のコンスタンチヌスによる意識的形成的事實をその對教會政策の中で跡づけんとする限りグロアクの線の

マクセンティウスとコンスタンティヌス

深化であると言える。今日ではマクセンチウスの對教會寛容政策を疑う者は殆ど居ないが、シェーネベックは之をコンスタンチヌスの對教會政策の形成に資したという歴史的役割に於て積極的に評價する點が新しいのである。それによれば、先づ三〇七、八年アキイレヤ發行の貨幣(Conservatores urbis suae)のうちの一つに見られる十字架の徴から推察される如き職人の個人的信仰に許された驚くべき自由が指摘され、次にロマ教會については、マクセンチウス登極と共に選任せられた司教マルケルスの時代の教會は、ダマスの墓碑銘より分るような流血を見る程の激しい懺悔論争が行われうる迄に自由を享受し、リベル・ボンティフィカリスに記されているように司教分區の建設、集會家屋の都心近くへの進出等、總じて活潑な教會再建活動が行われていること、續くエウセビオス時代にも尖鋭な懺悔論争が續きマルケルスと同様マクセンチウスによる追放という干渉を必要とするに至つたこと、平静を回復した次の司教ミルティアードス時代の教會には公式文書による教會財産返還が行われていること、等が證示せられる。同じ時代にアフリカの教會も自由に活動し繁榮していたことを傳えるオプタートゥスの記事もロマ教會の情勢と合致する。ついで、シェーネベックはTなる鑄造場の徴をもつコンスタンチヌス貨幣がスペインのタルラコではなくてイキヌム鑄造であること、ロマの基督教的彫刻をもつ石棺の分布範圍の中に三二二年迄はスペインが所屬し同年代にガリアには別の様式が支配しているからロマ・スペイン間には商業的結合あり、ガリア・スペイン間には存しなかつたこと、等を論據として、マクセンチウスは三二二年迄はスペインを把握したことを頗る説得的に論證して後、之また頗る問題のエルヴィラ宗教會議の年代を大膽に三〇七、八一三二一年の間に置き、會議開催をば教會を國家的社會的構造に組入れたとするマクセンチウスの政策と結びつけて考へる。マクセンチウス時代のスペイン教會の内情

について何事も傳わつていないことは、スペイン教會が懺悔論争に禍いされず平穩であつた證據であり、それは、エルヴィラ會議に於ける懺悔論争の穩健なる解決の結果であらう。⁽¹⁴⁾ コンスタンチヌスはこの成功を齎した指導者であつたであらうコルドバ司教ホシウスを、彼の世俗役人中の優れた者についてなした如くに、マクセンチウス時代よりそのまま引受けて之を重用し彼の教會政策の顧問となしたのである。⁽¹⁵⁾ コンスタンチヌスは兵制・行政等に於てはディオクレティアヌス體制の完成者であるが、宗教政策に於てはマクセンチウスの宗教政策の完成者である。⁽¹⁶⁾ 精力的なコンスタンチヌスの勝利と共にマクセンチウス暴君傳説の形成が始まる。基督教著作家に於て榮化せられた基督教的コンスタンチヌス像は貨幣面及び凱旋門に於ける太陽神の存在によつて統制されねばならない。併し乍ら傳説形成はコンスタンチヌスの側に於ける政治的要請に基くのであり、エウセビオスやラクタンチウスは官製版 *officielle Version* として公示せられていたものを採用したゞけの話であり、彼らを歴史的歪曲者となすは當らない。⁽¹⁸⁾ と。

シェーネベックの謂ゆる官製版とはグロアクの謂ゆる文獻的な形と軌を一にするが、兩者に於ては具體的な形では明かになつていないこの問題の取扱いは後段に譲り、ここではシェーネベックの考え方の基礎となる考證について若干の疑問を申し述べたい。⁽¹⁹⁾ 第一。シェーネベックは三〇八年四月十八日に於けるマルケルスよりエウセビオスへのロマ司教の交替と、同年四月十三日に於ける *Institus Tertullus* 及び *Status Rufinus* への *Praefectus urbi* の交替との、聖俗兩事件の併行を、ロマ教會内に於ける懺悔論争を繞る抗争の激化が原因となり、司教マルケルスの追放、*Praefectus urbi* テルトゥルスの罷免が斷行せられ（四・一三）それに次ぐ最初の日曜日にエウセビオスが司教に就任した、即ち對教會政策の一環として政治的役人の任免が行われた、と考へるのである。⁽²⁰⁾ 大變魅力的な推定

であるが、ダマスス墓碑銘などから確實なロマ教會内の騷擾事件が、正に三〇八年四月に至つて司教の追放を必要とする程の重要段階に立到つた、とする何らの證據も存しない。むしろ三〇八年四月のロマに於ける政情を見ると、丁度その頃マクセンチウスと父マクシミリアヌスとの分裂が起り、恐らく四月二十一日の *notarius urbis suae* を前にしてマクセンチウスは獨立的に自己と息ロムルスとをコンスルとして發令している。⁽²²⁾ ロマ政局の一轉回點をなすこの事件の重要性に想到する時、四月十三日の *praefectus urbi* の交替は教會内の騷擾よりも寧ろ右の政治的事件と關連ありと考へる方が少くとも自然である。そしてこの重大關頭におけるマクセンチウスによるロマ司教の追放は右の政治的事件と全く無關係だとする保證も存しないのである。第二。シェーネベックは、ロマ教會財産返還を指令したマクセンチウス勅書の年代決定を行い、⁽²³⁾ 勅書に *praefectus praetorio* より *praefectus urbi* に宛てた書簡が添附せられた事實に基き、⁽²⁴⁾ セルディカに於て三一年四月三十日に發令せられた寛容勅令のイタリアに於ける公布以後の範圍にて年代限定を行い、兩役を Rufus Volusianus なる同一人が占めた三一〇年十月二十八日より三一年十月二十七日を先ず除外し、それに續く *praefectus praetorio* なる Pompeianus と、三一年十月二十八日より三一年二月九日の *praefectus urbi* なりし Iunius Flavianus 又は三一年二月九日より十月二十七日の同役なりし Aradius Rufinus との間の書簡であろう(即ち三一年十月二十七日—三二年十月二十七日に限定)と推定し、⁽²⁵⁾ 進んで三二年四月十三日の完全な平穩裡に於ける初めての復活祭を下限とする(即ち三一年十月二十七日—三二年四月十三日に限定)。續いて三二年二月九日に罷免せられた Iunius Flavianus が三〇三年パレンスチナ總督として基督教徒迫害を行つた同名人と同一人であろうとの推定に立ち、この者の更迭こそ教會財産返還のための重要ステップであつたので

あろうと結論する。この考證も亦、對教會政策の一環として世俗役人の交代が行われたとなす考え方によるものであるが、再び當時の政局を顧みると、三二二年初頭には恐らく既にコンスタンチヌスの對マクセンチウス戰の行動が起されて⁽²⁸⁾おり而もロマ市内は民衆の暴動を豫想せねばならぬような不穩な形勢を見せ、謂わば超非常態勢にあつたと考えられる。以前より既に悪かつた民衆の惡感情は、⁽²⁹⁾ティベル河畔の戰直前には皇帝をして私人の宅に隠れしめる程彼を恐れしめていたのであり、又この戰に於ける軍の配置も亦民衆に備えていたと⁽³¹⁾推察されるのである。とすればロマ市内の治安に直接的關係を有する praefectus urbi の斯かる危機的瞬間に於ける交代は、正にこの民衆の蜂起に備えるため或は民衆の惡感情緩和の爲のものであつたと考えねばなるまい。そして又、騷擾に些かでも誘因を與えることを恐れたであろう帝が行つた教會財産返還の措置も亦、如上の政情と無關係であつたとする理由は存しないのではあるまいか。

- 註(1) H. v. Schoenebeck, Beiträge zur Religionspolitik des Maxentius und Constantin. Klio, Beiheft. XLIII 1939.
 註(2) 例へば K. Müller, Kirchengeschichte I² (1929) S. 341, 361. E. Schwartz, Kaiser Constantin und die christliche Kirche. 1913. S. 65. „Ganz anders Maxentius……“
 註(3) Schoenebeck a. a. O. S. 7. 註(4) Ihm, Damasi epigrammata 1895. Nr. 48. 註(5) Schoenebeck. S. 6. 13. 註(6) Ibid., S. 13—14. 註(7) Opatius Milevitanus, c. Donatist. I 17, 18, 19. 註(8) Schoenebeck, S. 15. 註(9) Ibid., S. 16—21. その他、⁽³⁰⁾マクセンチウスは法的に伊太利支配者に所屬するといふマクセンチウスのマイン失陥については文献史料に全く痕跡を止めないことが併せて論據とせられている。

- 註(1) の問題に關して激しき競争を呈したる Pignatoli, *Historia*, 1950. Heft 1. p. 84. 參照。 註(17) Schoenebeck, S. 21. 註(21) *ibid.*, S. 22. 註(19) *ibid.*, S. 27. 註(17) 彼の聖蹟に關して F. Altheim, *Runen als Schildzeichen*. Klio 31, 1938. S. 51 f. 註(22) Schoenebeck, S. 23—24. 註(22) J. Vogt, *Constantin der Grosse und sein Jahrhundert* 1949. S. 286. はニキエキヤンツの三十二年以前のインヂンチヤヌスとコンスタンチヌスの宗教政策に關する結論を「重要な個別的諸點に於て支持すべきなり」と認むる。尙ホキークツはニキエキヤンツのメヌイン歸屬説のことは賛成し乍らヘルウヰヲ會議の年代決定には反對する。 註(22) Schoenebeck, S. 8—9. 註(17) Lactant., 28, 2—4. *Eutrop.* X 3, 1. 2. *Zonar.* XII 33. 註(23) 之を就して Groag, S. 2437. 註(23) Schoenebeck, S. 13—14. 註(24) Augustin., *Brev. coll. c. Donat.* 34. „gesta alia recitarunt, in quibus legebatur Melchhiadem misisse diaconos cum litteris Maxentii imperatoris et litteris praefecti praetorio ad praefectum urbis, ut ea recipereant quae tempore persecutionis ablata memoratus imperator Christianis inusserat reddi. 註(23) praefectus urbi 是通稱はインヂンチヤヌス發給の日(十月二十八日)に交替した。 Groag, S. 2457. 註(23) *chronogr.* a. 354. p. 62. Mommsen. Groag, S. 2464. 註(25) Euseb., *Martyr. Palaest. Prooemium.* 1. 註(28) Groag, S. 2474. 註(27) 前節參照。 註(26) Groag, S. 2476. 註(16) 第二節註(16) 參照。

四

さて、マクセンチウスの敗死後、その治政と人格が勝利者コンスタンチヌスの側の政治的要請に基づいて彈劾せられ、暴君傳説が文獻的な形で、官製版として形成せられたというグロアク及びシェーネベックの推斷を、以下に於て基督教著作家のテクストに即しても少し具體的に追求してみたいと思う。

歴史的著述に際してカイサレア・キリスト教圖書館の豊富な藏書を驅使し、不器用な迄に史料に即した著述法を固守した⁽¹⁾エウセビオスにあつては、先に掲げたマクセンチウス記事も亦何等かの史料に基くであろうことは豫め推測せられるところである。況してロマに於ける事件の如きは如何に同時代のそれと雖も、殆ど一生をパレスチナ屬州で送つたエウセビオスには、史料を介せずしては知りうべくもなかつたであらう。マクセンチウス記事にあつては、このことはテキストそのものの中より明かだと言わねばならない。即ちマクセンチウス記事は先に譯出せる所からも知られる如く「教會史」と「ウイタ」との兩著に於て殆ど言葉通り合致するのであり、かかる事はエウセビオスにあつても筆者の氣附いた限り僅かにガレリウスとマクシミヌスの記事についてやや類似のことが存するにすぎず、此の二例と比較しても前者は尙顯著な合致を示している。而も「ウイタ」が「教會史」の記事を尊重しつゝ巧みな配置換えと文章の彫琢を行つている様は、このマクセンチウス記事が何らかの史料に由來する事を物語つていないであらうか。又ロマに於ける食糧不足が彼と同時代人の記憶によれば前代未聞であつたと語るエウセビオスの語句も亦マクセンチウス史料の使用をはからずも洩したものと見えよう。最後に、暴君記事の主要箇所たる「教會史」八・一四はラキエールの研究によつてエウセビオス後年の研究に基く挿入箇所とせられた部分に屬することを知るならば、マクセンチウス暴君傳説のエウセビオス以前に於ける史料としての存在は殆ど疑いえない。然らばエウセビオスが暴君傳説を汲んだ史料とは何か。その問題を考える前に、ラクタンチウスに於けるマクセンチウス記事について一考するのが便宜である。

正確な著作年代については尙意見は一定しないが、⁽⁴⁾ビションの説得的な論證がブランドを納得せしめて以來一致し

てラクタンチウスに歸せられ來つた「迫害皇帝の末期」は、かつてのブランドとは全く別の角度からシロモンによつて疑問視せられ(第一論文⁶)、遂には後代の偽作とせられた(第二論文⁷)。即ち、エウトロピウス、アウレリウス・ヴィクトル、ヴィクトル及びフェストゥスのエピトメらがディオクレティアヌス即位以前の時代について共通史料として用いた「失われた皇帝時代史」を析出せるエンマンの研究、エンマンの研究を擴大してヴィクトル、エウトロピウス、エピトメによる「皇帝史」の利用がディオクレティアヌス退位まで繼續せることを論證し、かつ同帝退位以後の時代についてヴィクトル、エウトロピウス、エピトメ、アノニムス・ヴァレシアヌスが利用せる「コンスタンチヌス家の歴史」の存在と、エウトロピウスのみの利用せざりしも一つの史料の存在とを確定せるグーゲナーの研究、等に基き、シロモンはその第一論文に於て、ラクタンチウスを含む上述全著作家はディオクレティアヌス退位以前では「皇帝史」を利用せること、同帝退位以後の時代については「皇帝史」と「ヒストリア・コンスタンチーニ」との二史料の存在を析出し、ゾシモスのみを、エウトロピウスは後者のみを利用し、ラクタンチウス、ゾナラス、ヴィクトル、エピトメ、アノニムスは兩史料を利用していることを綿密な章句比較を通して結論した。第二論文に至ると若干の個別的論證を訂正しつゝ第一論文の研究を繼續し、關係全著作家に於けるアウレリアヌス帝以後の個々の皇帝のウィタの章句比較を行うことにより、アウレリアヌスよりコンスタンチウス二世獨裁に至る史料一、コンスタンチヌスとリキニウスの共同統治迄の史料二、史料二を繼續しコンスタンチウス二世獨裁迄到達せる史料三、の三史料が推定せられた。シロモンによるならば、史料一は終始エウトロピウスの唯一の史料であり、史料二はゾシモス、アノニムス・ヴァレシアヌス、ペトルス・パトリキウス、コンティヌアトル・ディオニススの唯一史料であるが、史料二

の終結以後はゾシモスは史料一に移行し、アノニムス、ペトルス・パトリキウスは史料三に進んだのである。而して史料一及び史料三はマグネンチウスとシルヴァヌスの死以後の時代に記されたと推定され、かつ我々のラクタンチウスは主として史料二を利用しつゝも史料一をも知つていたのであるから、ラクタンチウス「迫害皇帝の末期」は史料一成立以後の偽作、恐らくは背教者ユリアヌス時代に新たなる迫害勃發を恐れていた基督教徒がラクタンチウスの名に隠れて迫害を警めた書であろう⁽¹⁰⁾、と。

この勞多きシロモンの研究は、史料二及び三とは異なるも一つの史料が各皇帝ウィタ夫に於て指證せられることは立證しえてゐるけれども、そのも一つの史料が、アウレリアヌスよりコンスタンチウスに至る迄一貫して記されていた同一の史料である、ということの證明はなされていないのである。そのためにはシロモンの如き謂わば機械的な章句比較ではなく、史料一を一貫する同一の主張、立場の如きものが追求されねばならないであろう。されば既にシュターデは「迫害皇帝の末期」に於ける重心がディオクレティアヌス帝迫害におかれてゐる事實を指摘して、ユリアヌス帝時代の偽作なるシロモンの結論を打破つたのである⁽¹¹⁾。

ところで我々の興味を惹く事は、ラクタンチウスに於けるマクセンチウス關係記事(彼の性格及び登極とコンスタンチヌスとの戦い)が殆ど全く史料二に由來する事が證明⁽¹²⁾せられた點である。そして之らの史料二に由來する記事の中で、父の復讐戰を宣したのはマクセンチウスの側であつたとする點⁽¹³⁾、軍勢はマクセンチウス軍が遙かに優勢だつたとする點⁽¹⁴⁾は、何れも事實とは反すると推察せられる記事であるだけに尙更史料二におけるマクセンチウスに對する敵對的傾向を示してゐると考えられる。而も史料一に於けるよりも一層ガレリウスに對する敵意を示してゐる史料二⁽¹⁵⁾

が、そのガレリウスへの敵意を、「マクセンチウスへのガレリウスの進軍は元老院を除き民衆を撲滅するためであつた⁽¹⁷⁾」という形で表現しているのを見る時、右の史料二におけるマクセンチウスへの敵意が、實は羅馬民衆と元老院との立場よりするそれであつたことが明かとなるのである。⁽¹⁸⁾

さて、この史料二はエウセビオスに於ても跡づけうるのである。シロモンによりラクタンチウスとゾシモスを基にして析出せられたところのミルヴィウス橋墮落の原因と經過に關する史料二の記事が殆どそのままの形でエウセビオスに見出だされるし、⁽²⁰⁾ エウセビオスも亦敗れたマクセンチウス軍の方が優勢だつたと傳え、⁽¹²⁾ コンスタンチヌスのガレリウス宮廷よりの脱走事件も亦史料二である。⁽²³⁾ そして史料二に於ては「大酒飲みで酔つた覺句に不可能事を命じ醒めてから後悔して取消す」なる性格がガレリウスに與えられているに對し、⁽²⁴⁾ エウセビオスはその同じ性格をマクシミヌスに移し與えている興味ある事實は、⁽²⁵⁾ 史料二の粗忽な利用を示すものと言えよう。ラキエールによつて推定せられたエウセビオスの利用せる國民羅馬的立場に立つ二史料の一方なるコンスタンチヌス、リキニウス兩頭支配正當化を指す一史料とは、⁽²⁶⁾ 恐らく右の史料二に當るのであろう。然るにエウセビオスには、コンスタンチヌスの方がマクセンチウスに對する挑戰者である、となす著しい記事の如く、⁽²⁷⁾ 明らかに史料二とは異なる史料の利用が注目せられる。かの羅馬民衆虐殺事件を傳えるエウセビオス記事は、⁽²⁸⁾ ゾシモスに代表せられる史料二の客觀的敘述とは異つており別の史料を豫想せしめる。そして極端なマクセンチウス暴君像は史料二とは異なる別の史料に由來するものの如くであり、從つてラクタンチウスに於てはエウセビオスに於ける如き極端な暴君像を示していないのは以上の如き史料の關係であらう。

かといつて極端な暴君像をもつていた別の史料をシロモンの謂ゆる史料一と直ちに同一視することは危険であろう。それではシロモンの行つた如き關係全著作家のテキスト比較を通して此の別の史料を析出する道をとらずに、マクセ⁽⁴⁰⁾ンチウス像の形成せられた根源を出来るだけ端的に見出だすことは出来ないであらうか。かく考察を繰らす時に浮び上つて来るものはエウメニウス及びナザリウスなる二人の頌詩作家である。即ち、ギリシャ移住民を祖父とし二五八、九年にガリアに生れ、二八九年四月二日コンスタンチウスの世話でマクシミアヌスに頌詩の御前朗讀をして認められてより、マギステル・メモリアイ(官房長官)として後者に重用せられ、後には故郷の町アウグストドゥヌムに修辭學校を開き三一三年頃に死ぬまで、マクシミアヌス、コンスタンチウス、コンスタンチヌスに合計八篇⁽³⁰⁾の頌詩を捧げ古典教養復興に功績あつたエウメニウスに歸せられる頌詩第十二⁽¹³⁾(三一三年初秋)と、ヒエロニムスにより優れた辯論家と記されたナザリウスが三二一年にコンスタンチヌスに捧げた頌詩第四⁽³⁸⁾との二つが、マクセンチウスについて多くの言及を行っている頌詩である。前者はコンスタンチヌスの父を恩人と感ずる一詩人が、マクセンチウス敗死直後一年以内の生々しい印象を以て作つた頌詩であり、後者は成立年代こそ下るが、以前に同一詩人により作られた詩を利用しつゝ、暴君マクセンチウスの敗死をロマの解放者英君コンスタンチヌスと對置することを以て主要テーマとする注目すべき頌詩である。後者に於てマクセンチウスに對する過度の中傷が存するばかりか、既に前者に於て、「思⁽³⁶⁾かにして無價値なる動物」「ロマの殺害者⁽³⁷⁾」の「凡ゆる恥行によつて汚されたる肉慾⁽³⁸⁾」「迷信的惡行⁽³⁹⁾」「元老院と民衆の殺戮⁽⁴⁰⁾」等が巧みにコンスタンチヌスの徳行と對照的に歌われ、その容貌迄もがコンスタンチヌスの美しい外貌に對⁽⁴¹⁾比して輕蔑すべき矮少な恐しい怪物とせられているのを見る時、ここに既に典型的な暴君像が打出されていることを

マクセンチウスとコンスタンチヌス

ハンガリーの研究家アンドリユー・アルフォエルディは、最近に於てもコンスタンチヌスの回宗の問題を考察し、それが幼少時代に父コンスタンチヌスの許における基督教的教育によつて準備せられたものなること、社會的政治的組織に於て強力であると共に國家否定的ではなかつた教會の實力の中にコンスタンチヌスは古代人らしい心理で神性の力を見たこと、コルドバ司教ホシウスによつて同心の直接の準備がせられたこと、等を論じ、エウセビオスとラクタンチウスが傳える所の對マクセンチウス戦直前の十字架の幻と夢の物語が、古代人の心理には通常のことでもありコンスタンチヌスには現實的な出來事だつた、と斷じている⁽¹⁾。

このアルフォエルディの所説に對しては、コンスタンチヌスの許に於ける所謂基督教團氣なるものはそれ程證明濟みのものではないこと⁽²⁾、對マクセンチウス戦にホシウスが帶同せられたことはシェーネベックによるスペインのイタリア歸屬説によつて殆ど否定されること、等が先ず言われねばならないが、特に幻物語については、私見によればそれを傳えるエウセビオス、ラクタンチウスの記事そのものの中にこの物語の由來を探る鍵が見出だされるのである。先ず三三七年末又は三三八年初頭に執筆せられた「ウィタ」に於てエウセビオスが幻物語の前置きとして「若し餘人がこの出來事を傳えたならば容易には信ぜられないであろうが、勝てる皇帝その人が、之を記す予に向つて、ずつと後年に予が帝との友情と交際を許された時に、誓いを立てて物語つたものである⁽³⁾」と語つている言葉に注意するならば、エウセビオスがこの記事を書く前に既に餘人によるこの幻傳説が巷間に行われていたこと、その巷間の幻物語は人の信ずる所ではなかつたので帝自らの誓いを言及することによつて人の信用をえんと努めていることに氣がつく⁽⁴⁾。即ち幻物語はエウセビオスの創作ではなく既存のものを採用した迄の話である。それより約二十二、三年以前に

執筆せられたラクタンチウスの「迫害皇帝の末期」に於て一層單純な形で同じ幻物語が採用せられて⁽⁵⁾いる事實と、三二三年に最後の脱稿せられたエウセビオス「教會史」に於ては幻物語が全く知られていない事實を知る者は、右の確信を強めると共に、幻物語の漸次的形成と發展の事實をも推斷せざるをえない。そして斯くの如き基督著作家によつて採用せられた幻物語の基督敎界における形成は、本稿が跡づけた如きコンスタンチヌスの要請に基くマクセンチウス暴君傳説の形成の裏面をなす全く同一の歴史的過程に屬することも既に明かである。

コンスタンチヌスの側における要請に基く幻物語の漸次的形成と、基督著作家による採用の事實を前提するならば、「教會史」がそれを知らず「ウイタ」が知つてゐるという事實は、グレゴワルの主張する如くには「ウイタ」僞作説の根據とはならず、單に「教會史」に於ては未だ知らなかつたという單純な事實として受取ることが出来るであろう。そしてエウセビオスにおける史料利用の特殊性を念頭におくならば、ブルックハルトの如く「ウイタ」の故にエウセビオスその人を「忌むべき頌詩作家」として弾劾することもなく、又グレゴワルの如く「ウイタ」をエウセビオスから引離すこともせず、「ウイタ」をエウセビオスのものとなしつゝもエウセビオスなる人物に徒らなる非難をあびせることもなく、かつてシュヴルツ及びパスワリの⁽⁷⁾推定した如き背景によつて「ウイタ」の成立を説明して大過ないのではあるまいか。

註(1) Andrew Alford, *The Conversion of Constantine and pagan Rome*, transl. by H. Mattingly, Oxford, 1948.

S. 5—24. 補註二を見よ。 註(2) 例えば Schoenebeck, S. 21. コンスタンチヌス治下のガリアで多くの殉教者が記録せ

られている。 註(3) Euseb., v. C. I. 28. 註(4) この章句は又、右の幻物語りは古代人にあり勝ちな心理だとする

一橋論叢 第二十八卷 第四號

アルフォエルディの所説を打破す。Alfoldi, a. a. O. p. 19, 22—23. 註(5) Lactant, 44, 5 u. 6 は *De Preceptis* となつて居る。尙この箇所は史料にて屬せざる。Slomom, *Hermes*, 47, S. 268. 註(6) H. Grégoire, *Nouvelles recherches constantiennes*, Byzantion XIII 1938 publié en 1939, p. 551. 尙之は拙稿「エウセビウスの關係を以て見たるコンスタンチン問題の若干側面」(青山經濟論集)三ノ二所載)に於て簡單に引かれた。註(7) E. Schwartz, *Eusebios*. (PW VI 1909) S. 1422 f. G. Pasquali, *Die Composition der Vita Constantini des Eusebios*, *Hermes*, 45, 1910, S. 369—386. 兩者共註(6)所掲の拙稿に於て紹介した。

—一九五二・七・一八—

(補註一) 本稿はマクセンチウスのダムナチオ・メモリアイの根源を頌詩作家に求めてみたが、右ダムナチオの歴史的過程の伏線をなすロマ元老院及び民衆の立場と頌詩作家との精神的關連、頌詩に於ける作家の創意によるモチーフと皇帝の要請との微妙な關係、等の重要問題が尙論じ殘されていることを指摘しておく。後年乖離して行くコンスタンチヌスと元老院との精神的立場の相違は、少くともロマ解放の當初は相互利用の關係にあつて、マクセンチウスのダムナチオに對しては共働したと考へてよいであらう。尙、コンスタンチヌスによるマクシミアヌスのダムナチオ・メモリアイ (Eusslin, *PW*, XIV 2, 2515 f.)、元老院的なアムミアヌスによるウマレンティニアヌス一世のダムナチオ (Alfoldi, *A Conflict of ideas in the late Roman Empire*, Oxford, 1952) 等、この世紀に於ける類似的歴史的過程について併せて考慮することは興味がある。

(補註二) アルフォエルディはコンスタンチヌス側の要請に基くコンスタンチヌス自身のロマ解放者としての榮化、マクセンチウス、マクシミアヌスのダムナチオ・メモリアイを、單に元老院獲得の目的で行われたと考へるために (p. 63 f.)、基督教・反異教的な幻物語の形成を、ダムナチオと同一關連で考へることが出来ないものである。

—一九五二・九・一九—